
恋姫十無双 ~ 黒槍の御遣い~

yokomiti

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋姫十無双 ～黒槍の御遣い～

【Nコード】

N4927Y

【作者名】

yokomiti

【あらすじ】

一刀……ごめんなさい。 貴方の愛した魏は負けてしまいかもしれないわ……。

魏が三国を統一し、平和が流訪れた世の中。

しかしその肝心なる魏は一刀を失ったことの喪失感によって、気落ちしていた。

そんな時起きた、五胡の侵攻それを排除するべく魏軍が討伐に向かうが、敗退。

蜀の翠率いる軍によって何とか逃げ延びる。

そして、一つの城に居を構えた華琳。

ある夜、華琳が空を見上げていると、一つの流れ星が流れた。

新たな御遣いの訪れ（前書き）

この作品はbeasonさんの作品恋姫十無双の二次創作です。
主人公が一刀君ではなくオリジナルです。

魏 後が舞台ですが、ラブコメに魏勢は関わりません。
魏のヒロイン勢の婿は一刀君のみです。

新たな御遣いの訪れ

「フフツ、今のこの様を一刀が見たらなんて思うかしら」

ここは、魏領内にあるとある城。その屋根の上で私こと曹孟徳……華琳は一人、自嘲しながら寝転がりその遙か上空、天にある月を見詰めていた。

そんな私が思うのは彼のこと、我ら魏の皆と苦労しながら馬鹿しながら笑いあいながら彼と共に天下を目指していたときの事。

そして、天下統一を成しえたとき彼が消えてしまった時のこと。今日出ている月はその日に見た月に少し似ていて、私は何だか嫌だった。

あの日から、一刀が天に還ったその日から、私、いや魏の面々は弱くなったと思う。

あれから既に三年経ち私達は彼が消えた事により生じた心の隙間を埋める術を見つけた。

といつても、春蘭は未だ夜になつたら時々だが涙で枕をぬらしているし。秋蘭、稟はため息をつく回数が増えてきたし

桂花でさえも行動にキレがなくなつたというか。風は居眠りをすることが増え何やら思いつめている様子だった。

霞は飲む酒の量が目に見えて増えた。そして季衣と流々の笑顔もぎこちないし、一番接していたであろう三羽鳥は未だ目を赤くしているときがある。

そして私は……。

私も一刀が消えた事に対して何もただ指をくわえたままいたわけではなかった。

天という未知なる物に対して、私なりに考え一刀を取り戻せない

だろうかと講じた策が天下三分の計である。

しかし、それもどうやらはずれのようだった。三年たった今でも還ってくるということは無かった。

「ふう………」

そして、今回の事である。

五胡の侵攻。完全に隙を突かれた。

一刀がない事で、魏の面々に隙が出来た。いや、一刀のことを良いわけにするなんて私はついにボケでもしたかしら。

今回のことは完全に私達の怠惰の結果だ。何とかせねばならない。今既に、五胡の侵攻は涼州にまで及んでいる。侵攻の報を受け慌てて私達は出撃をした。

しかし、敗北とまでは行かずとも手痛い、被害をこうむりこうして蜀の援軍であった翠達に一旦場を預けこうしてここまで撤退してきたわけである。

「何とかしなければならぬわ。一刀かが帰ってきた時。魏がなくなっていましたじゃ、話にならないものね」

そうして、腕で目を押える。色々な思い、記憶が私の頭の中をめぐる。

それは、ただの日常、一刀がいた頃のただ変わらない日常である。思い出というものは常に美化されそして忘れ去られていく物だ。

その証拠に私の中の一刀、その顔、声を思い出すが段々と難しくなってきた。

「一刀、合いたいよ………」

小さく呟く。私の頬を何かが流れた涙だ。

あの時、後悔などは無かった。しかし、今弱くなった私に同じく一刀に聞かれたとしたら後悔していると答えてしまっただろう。

何が悪かったのか。低軍山で秋蘭を助けたことか、それとも我ら魏が天下を取ってしまった事か。

どうすればよかったというのか。どうとつても私達と一刀の間には決して結ばれない。ちくしょう。ちくしょう。

「私達が何をしたっていうのよ！！ そりゃ、私達が天下を取ったことは天の歴史を変えたかもしれないわ！！ でも、それで一刀を取る必要があるの！？」

私は腕をどけ立ち上がり、私に苦しみを与え続けている満月に向かって叫ぶ。

もし、ここにもう一人私がいたらふん、全く霸王らしからぬ発言だわ。なんて言うと思う。

「しょうがないじゃない！ 私の中の一刀が大きすぎるの！！ もう、苦しいのよ！」

ふん、それこそ戯言だわ。 あなたは誰？ そう、曹孟徳よ。

誰もがひれ伏す霸王よ。 だけど今のあなたでは誰もひれ伏すどころか見向きもしないわ。

だって、今のあなたは何処からどう見てもただの小娘だもの。

心の声が私の言う事を真っ向から否定する。その言葉が、私の心を貫く。 そう、今の私はただの小娘だ。

「わかってるわ。 わかってる わかってるのよ」

しょうがないわね、そんな小娘なあなたには今の状況をどうにか

するには荷が重いかもしれないわね。そのままでは、一刀に会う前に魏という国は消えるわ。

その事を実際に考えるとゾツとした。目から涙が溢れ、身体が震え、止まらなくなる。目の前が暗くなってくる。

もう、ちょっとからかったただけなのに泣かないでよ。ふう、私も一刀の帰る場所が無くなるというのは許しがたいからあなたに良いものを貸してあげるわ。がんばりなさいよ。じゃあね。

「え？」

私はその心の声があったと思われる言葉に間抜けな声を出した。そして、ふと目を上げ月を見る。

新たな御遣いの訪れ（後書き）

始めまして横道と申します。

横道は、詠、華琳、桂花が大好きです

感想や、しおりを頂けると横道は喜びます

これからよろしく願います。

会合（前書き）

注意、御遣いのつかいという字、遣いになっていたり、使いになっていたりするとは思いますが気にせず読んでください。

会合

私は目を上げ月を見る。何だろう？ 心の声が言っていた良いものとは……。

すると、私の目があるものを捕らえた。夜空にあるそれは光を発し、空を横断し落ちてきている
流れ星だ。

私はあのときのことを思い出していた。一刀と始めてであったときのことだ。その時も不可思議な流れ星があった。

そしてそれはドンドンと高度を下げていきこの城の近くにある、
林に墜落した。

「一刀！！」

私はそれを見、落ちたと思われる場所を推測覚え、そう叫ぶと急いで屋根から降り、馬を待機させてある場所へと向かっていた。そしてそこへと向かう途中に秋蘭に出会った。

「華琳様！！」

「ごめんなさい。秋蘭 直ぐに戻るわ。今は理由を聞かないで」

私はそう言ってわき目も振らずに走っていく。この事で何かが変わる。そんな期待が私の胸にあった。

馬屋に向かうと私は対して馬を選ぶような事もせず適当に早そう
と思われる馬を選別し、その流れ星が落ちた所へと向かった。

私は馬をその林へと向かわせた、馬屋に行く途中周りの者たちが私の事に気づいたが何も言う事は無かった。

私の霸王としての威光がなくなってきたからであろう。

私は急いだ。そこらにいる兵達に馬を当てないよう起用に操りながら目的地である林を目指す。町を出、目の前に生え並ぶ木々を抜ける。そして何故だろうか落ちだと思われる部分からは光が放っていた。私は馬を降りてその場へと歩いてゆく。

そこには、一人の黒い鎧をまとった人物が一人たっていた。

「一刀……なの？」

私は片手は馬の手綱を握り、もう片方の開いている手は側に生えていた木に添える。

私はその人物が一刀なのかどうか分からなかった。見ての通り鎧をまとっているからだ。片手にはどす黒い槍を持っていた。

そしてその鎧がこちらを向く。先ほどまで発していた謎の光はいつのまにか収まっている。

そしてその鎧は私に向けて首を横に降った。それはこの黒鎧の人物は一刀ではないということだ

「そうなの……」

私は落胆した、勝手にこの流れ星が一刀だと勘違いしただけなのだ。

そしてその男は私の方へと歩み寄ってくる、そして臣下のように頭を垂れて言った。

「私は新たな天の御遣い。この世の危機を救うべくここに馳せ参じ参った。あなたの命一つで私はこの世で最強の矛にも盾にもなりましょう。」

私は前の世界ではKと呼ばれていたのでこちらでもKとお呼びく

ださい」

「そう、あなたは天の御使いなの……」

華琳にはこの男の言い方にふと思ったことがあった。

「なら、本郷一刀はあれからどうなったか分かるかしら？」

それはこの男は、どうやら自分を天の御遣いだと認識している事である

以前天の御遣いとしてここに来た本郷一刀は、自分を御遣いだとは認識していなかった。それに対しこの男は自らを天の御使いと言っている。

ということとは、この男は本郷一刀よりもずっと天の御遣いとして近い存在にあるのではないか？それが華琳がその引掛かりにたいして思ったことである。ならば、本郷一刀のその後を知っていたとしてもおかしくは無い。

K姿勢はそのままに頭だけを上に向け、質問に応える。

「ふむ、それはあれからと考えてよろしいのかな？」

「ええ」

「ならば、話せない事もあるがまあ、おおまかになら話しても良いだろう」

本郷一刀は今現在君達の言う所の天にて、必死こいてこの世界の知識を求め、剣術の修行をしているはずだ。ここの世界に戻ったときに少しでも役に立てるようにと」

華琳はその話を聞き、先ほどまでぬらしていた頬を再度ぬらした。

両手で年相応の少女のように涙を拭う。

その様子をKは黙ってみていた。

そして、華琳はひとしきり泣くとキリッと顔を上げる。その顔は今まで失われていた霸王としてのオーラが戻っていた。

「そう、一刀はそんなにも頑張っているのね。ならば、私も何時までも躓いてばかりはいられないわ。あなたKといったわね。今涼州という場所に五胡という連中が侵攻をしかけてきているわ。その退治をお願いしたいの。出来るかしら？」

「御衣」

Kは再び、頭をたらず。華琳はいつもの通り片手を腰に当てている。

その顔にはいつだかに消えた笑みが戻り始めていた。

「ありがとう、私の名前は曹孟徳。あなたには真名を預けるわ。これからは華琳と呼びなさい」

「ありがたく、頂戴いたします」

「では、移動へはこの馬を使うと良いわ。場所は分かるかしら？」

Kは立ち上がり、華琳から馬の手綱を預かる。

そして、一気にその馬に飛び乗った。その勢いで馬が暴れたが、Kはムリヤリ押さえつけた。

「わかります」

「なら、大丈夫ね。頼んだわよ」

「では行ってまいります」

Kは華琳から背を向けて、五胡を打ち倒すべく涼州へと走り出した。

会合（後書き）

以上第二話でした。
お楽しみいただけたら幸いです。

対五胡戦

謎の黒鎧男Kは馬を飛ばし三日ほどで涼州へとたどり着いていた。馬には三日御晩休まずに走らせたために涼州へと着いたときはその馬は口から泡を吹いていた。

「ありがとう」

Kはその馬の背を撫でその馬から跳躍すると、馬の進行方向の遙か前方に着地し、馬は役目を終えたとしても言うように足からその場へと崩れ落ちていった。

そしてKは鼻をクンクンと動かし、戦の匂いを察知するとそちらの方向へと馬顔負けのスピードで走り出していった。

走り出し、しばらくすると目の前に少し高めの丘を発見する。

Kはその丘へとのぼりそこから下を見下ろす。すると、ここから少し西の方向に交戦していると思われる団体が会った

Kはその闘っているもの達に向けて目を凝らす。すると、Kはあることに驚いた。

涼州で戦っている、恐らく見方の軍の装備は嚴重に固めているのに対して、敵の五胡の軍は一人一人見るからに身軽な鎧しか着込んでいなかった。

その分見方の軍よりも小回りが利くため苦戦を強いられているようだ。

「ふむ、これは早急に助けねばならないようだ……」

見ればドンドンと、見方側の軍が押されていつている。

Kはそこからひとツ飛びその戦場の中心地を目指しジャンプした。

この戦いが始まり既に早一週間が経とうとしていた。

当初は魏の撤退を手助けするという事で、蜀の筆頭軍師の朱里から出撃の令が出された。

相手は馬の使いになれている五胡ということもあり、万全を期して马超>翠<を將軍とした軍が編成された。もっともこれには攻撃されているのが翠の出身地という事もあり、本人からの希望もあつたよふなのだが。

そのようなことから、この戦いは当初あつさり相手側が引くと思われていたがこの軽装備故の機動力に惑わされてこずつていた。そんなときだった。

蜀軍と五胡の軍の丁度間を二つの軍を分けるように何か強烈な一撃が放たれたのである。

「なんだ!?!」

「おいおい、いったいどうしたってんだ?」

「もー、なんなの? 五胡だけでいっぱいっばいなんだから違う敵とか出てこないで欲しいんだけどー」

いきなりの事に驚いている両軍、そして翠と馬岳>蒲公英<両將軍がともに声を上げ、上空を見上げる。

するとそこには何やら黒い塊がここに向けて落ちてきているように見えた。

「あわわわわわわ」

その事に慌てふためいている蒲公英。

そして、その黒い何かは蜀軍と五胡軍の間に墜落した。

ドーンという大きな音と共に重さゆえか、墜落と同時にあたりに大量の砂埃が舞った。

その黒い何かが持つている黒い槍を一振りすると待っていた砂埃が消え去った。

そしてその黒い何かは蜀軍を背にしてここにいる者全員に話し掛けるように大声をだした。

「我は、魏王、曹孟徳の命によりここに馳せ参じた。 我の主の命はただ一つ五胡軍君達を撤退させる事だ！ そのまま逃げるもよし 立ち向かってくるならこの槍のさびにしてくれようぞ！！」

そう言うつと、さすが五胡軍この謎の男の気配を察知したのか凄い勢いで引き返していった。

しかし、それでも大群といえるほどの量の兵がここに居残った。

「君達は残り我と戦う事を選んだか、よろしいならば蹂躪だ」

その謎の男はそう言うつと、持っている槍を構え五胡軍のど真ん中に突進して行った。

そして、その男は刺し、なぎ払いという単純な作業を軽快なステップで繰り返していた。

相手の五胡軍もそれに応戦しようとした方向かっているがいかんせん相手が悪い、その男の前になすすべもなくただ兵の数を減らし続けていた。

その様子はその男が言ったとおり、戦闘というよりも蹂躪の方が正しいのかもしれない。

ともかく、その場にいた蜀軍の兵の皆はただその光景に呆然とし

ていた。

そして、最後の一人にその黒い槍が深々と突き刺される。必殺の一撃だった。

その男は最後の一人に止めを刺し終えると振り向き蜀軍の将、馬超>翠くと馬岳>蒲公英<のいるところに向かい歩き出した。

途中の兵達がこのような危険な男を通してなるものかと立ちふさがるが、紙のようにちぎっては捨てられていた。

そしてついに男と翠が対面した。二人はこの男を警戒し武器を構えている。

「おいおい、安心しろ。俺は君達の見方だよ」

「そうかだが、あんな圧倒的な力を見せられてはそうやすやすとは信用できないな」

「それはしょうがないと思うが、実際に俺は曹孟徳の遣いだ。それ以上でもそれ以下でもない」

翠は言いながらその男の真意を探ろうとしていたが、実際それほど頭の回らない翠にとってはそれは無茶な注文だった。

「ああー、やめたやめた。あたしにはこういう腹の探りあいとかは向いてないや」

そういつて翠は武器を下ろして頭を左右に振る。ポニーテールにしてある髪の毛がフリフリと揺れた。

しかし隣の蒲公英は未だ武器を構え、隙を見せまいとしていた。

「助かったよ。正直あたし達でも五胡の軍にもうすこし当たられ

ていたらやばかった」

「ふむ、まあ。俺は主の命に従ったまでだがな」

そう言つて二人は歩み寄り、お互いの手を握り合う。男の声はその全身覆われている鎧のせいなのかくぐもつて聞こえていた。

お互いの顔には男の顔は鎧で見えていないが、笑みが浮かんでいた。

「あたしの名前は姓は馬、名は超、字が孟起だ。馬超と呼んでくれ、よろしくな」

「俺の名はKと名乗っているよろしく頼む」

「もーっ、ねえさまは何でこんなめツちゃ怪しい人のことをポンポンとしんじられるのー!？」

隣では蒲公英があっさりと、自分の姉がこの怪しい人物Kに対して気を緩めたことに大声を上げていた。

「それでKは曹操の命でここまで来たわけだ」

「ああ、そうなるな」

翠とKの二人はあれからその場からすこし離れたところで陣を取り腰をやすめていた。

Kについては翠が陣を組んだときに直々に事情を曰く、曹操からの援軍であるということと話をつけてある。

そして今その翠、蒲公英、Kの三人は火を囲み持ってきていたそ

れほど強くない酒を開け飲んでいた。

Kは酒を飲むために頭にかぶっている鎧は脱ぎ捨てて傍らにおいてある。

翠とKは普通にゴクゴクと酒を飲んでいるがその場から少し離れたところでは蒲公英がちびちびと飲んでいた。

「で、Kはこれからどうするんだ？ あたし達は一旦蜀へ帰って報告してきたんだけど……」

「それなんだが、その報告はこの軍を蜀に帰らすことで行っていただけたい。翠には俺がしっかりと五胡の連中を撤退させたという事を我が主に報告してもらいたい」

Kは持っていた酒が入っている器を膝の上に置き、翠の目をまっすぐに見て言う。

先ほどまで何とはなしにKの方を見ながら飲んでいた初な翠は急に見詰められて頬を赤くしていた。

「わ、我が主って言うつと曹操のことか？」

「そうだ」

少々どもりながらも尋ねる翠、そしてKがそれに答えると。その頬の赤さと暑さをごまかすように持っている杯に注がれている酒をグイッと飲み干す。

「頼めるか？」

翠にそう尋ねながら、Kはそばに置いてある徳利を取り空になった翠の杯に新たに酒を注ぐ。

「難しいかもしれないな。報告してからでもいいならいけないことも無いけど、ただ將軍なしで軍を勝手させるのはちょっとな・・・」

翠はどうもといった感じに頭を下げながらその酒を受けクイクイっと飲む。

そして、その話を隅で聞いていた。蒲公英は元気よく立ち上がり言った。

「なら、私が軍を蜀までつれていくよ！！ 姉さまは、そのKつて方と二人で行けば良いんじゃない？」

「なるほど！！ その手があつたかあ！！」

蒲公英は小悪魔の微笑で翠に二人での部分を強調しながら言うが、翠は大分酒が回っているらしく蒲公英のイタズラに気づいていなかった。

対五胡戦（後書き）

全七部構成予定。もしかしたら八部になるかもしれない。

六部後半まで現在執筆完了中。しかし亀筆なのでゆっくり投稿。

横道です。

今回もお読みいただきありがとうございます。

お楽しみいただけましたら幸いです。

翠と一緒に(前書き)

文字数が少ないのは私用です。

嘘です。私の文才が無いからです。

では、第四話お楽しみください

翠と一緒

そうと決まればあれよこれよと手際の早い事、その日の晩はその場で一旦睡眠を取り次の日の早朝軍の皆に通達をした。

曰く、本日未明より馬岳將軍指揮の元蜀へと帰還する、猶馬超將軍については援軍をよこしていただいた曹操に礼を申し上げに行くために同行はしないという事。

その報が全員に回りきった頃にはもうすでに太陽は昇り始めていて、蒲公英が軍の兵士皆をつれここから蜀に出発したときには既に太陽は一番高く上りきっていた。

Kと、翠はその行軍を見送った後ゆつくりと、魏へと歩みを進めていた。

「しっかしKのその鎧？ は着ていて重くはないのか？」

翠は隣を馬に乗り歩くKを皆がらいう。馬に負担がいつていないか心配というのもあった。

「ああ、大丈夫だ。これも見た目ほど重くは無いからな」

「ふうん。ならいいけど」

そしてその後はゆつくり七日ほど時間を掛けながら、華琳が入る城へと向かっていた。

その間たいした五胡からの妨害等はなく、ようやく目の前に華琳がいる城が見えてくる。

「おお、あれか？」

「そうだな」

翠は嬉しそうに目の前に聳え立つ城を指差しKに尋ねる。Kはそれを肯定する。

二人はこの七日間で馬の事やら、戦い方のことやらを話し合い随分と仲が深まり翠は真名をKへと預けていた。

「じゃあ、早く行こうぜ」

翠はそう言うのと馬のスピードを少しだけ上げる。それに、Kは微笑しながら着いていった。

今翠とKは魏の重鎮の面々が座る仲で一段低くなっている場所で頭を深く下げていた。

その様子に華琳以外の魏のメンバーは何事だろうかと既に見知っている翠はともかくしてこの怪しげな黒鎧は何なのだろうと疑心の目を向けていた。

その中でも春蘭と桂花だけは完全に敵対しているような目だ。

一人事情を知っている華琳だけはいつもと変わっていない。

そんな中、ようやく華琳が口を開いた。

「この度の五胡の撤退みごとであった。そちには後ほど褒美を取らせよう、今はその場で何があったのか私に教えてくれるかしら？」

「はっ、私達が魏軍から五胡の軍勢を引き受けた後の事から話します。魏軍から五胡の連中を引き受けた後、私達蜀軍も五胡のあの立ち回りに苦戦しておりました。」

そんな時、遙か上空から、このKと名乗る者が降り立ち、戦局

あつという間に変えてしまいました。そしてその後この者は蹂躪するよ様に五胡の軍を打ち払い今に至ります」

慣れない言葉で翠は説明をしていた。途中途中どもってはいたがちゃんと最後までいえたのでよしといえるだろう。

「なるほど、そちらのKなる者、先の証言に偽りは無いか？」

翠の言葉を腕を組みながら目をつぶり吟味するように聞いていた。華琳がとなりで頭を垂れているKに尋ねる。

「はい、その通りでございます」

「よろしい。ならば後ほどとらせる褒美は何が良いか考えておくがいい。私達はこれからの事を踏まえ群議に入る。下がりなさい」

「「御衣」」

そう言つと二人はその場を離れる。後ろにある扉から二人は出て行った。

「ふう、」

それを見て、魏の王である華琳はため息をもらす。素直に本当にこの短時間に五胡の軍勢を退けた事を驚いているようであった。

「どういふことですか？ 華琳様、あの者は何者なのです？」

それを見て魏の大剣である春蘭が先ほどの謎の人物について尋ねる。その声はここにいる他の者の声を代弁していた。

それに華琳は先ほどと同じようにため息をつきながら答える。

「本人曰く、天の御使いなのだそうよ。「なっ……」実際私もある意味では彼に助けられたかもしれないわ」

「華琳様！！ 本郷以外に心を許すなど……！！」

「大丈夫よ、春蘭これから先私の唇を許すものは一刀だけだから。それについても今から話すわ」

そこまで言うくと華琳は一息つき周りを見渡す。そこには一刀と親しかったもの全員がいた。

「皆のもの、よく聞きなさい。 そうね一週間以上前に私は月を見ていたら流れ星が地上に落ちるのを見たわ

私は、一刀がここに来たときのことを覚えていて一刀かと思ってその場所へと向かった。

けれど、そこにいたのは自らを天の御使いと名乗る、不思議なやからだけ。

その者は私の力になりに来たといっていたから敵ということはず無いと考えて良いでしょう。

そして大事なのはここから、私はあの者が天について詳しくそうだったから、一刀がどうなっているのか聞いたわ。

すると、一刀は今ここに戻るために勉学を学び、身を守るための剣術を習っているらしいわ。

そこで思い起こされるのは我らのこと一刀がこんなにも頑張っているのに我らはこんな腑抜けていてもいいの？ そんなはずはないわ

誰よりもこの平和を望んでいた一刀。 けれどそれを見る事の出来なかった一刀。 その一刀は今ここに帰ろうと努力をしている。 なら私達がする事は何？

帰れる場所を守る事でしょうか？　ならば、我らは何時まで転んでいられるわけには行かない立ち上がりなければ」

華琳の演説が進むにつれ、その場にいる者たちの空気が変わってきた。

それは、以前一刀がいた時のような魏よりもはるか強固な存在として生まれ変わろうとしているかのようだ。

「皆のもの！！　今努力している一刀に誇れるように自己研鑽を怠らないように！！」

「はっ！！」

幼虫が蛹になったように蛹の時期は終えいま魏という大国はさらなる力を蓄え成虫へと今生まれ変わった。

「なあなあ、これからどうするんだ？」

あの場から出た後、後ろを着いてきていた翠がKの隣に並び彼の顔を覗き込みながら聞く。

それに対してKは驚いて聞きかえした。

「え？　蜀に帰るんじゃないのか？」

「なに言ってるんだKは。せつかくここまで来たんだから何か観てから帰るに決まってるだろう」

翠は自分がこのまま帰るのだと思っているKに少しだけ怒りながら言う。

腰に両手を当てプイとしている彼女はとても可愛く見えた。

Kはこのまま、翠に機嫌を損なわれているとマズイと感じ、フォローをすることにした。

「まあ、俺はこれから主から何かしら言われることがあるだろうからなあ、ここに来たのも数日前だし」

「え？ そうなのか……」

その事実には翠は驚いたようだった。目を見開きKの方を見ている。そして、何を思ったのかしばらくすると翠は手を前で組みもじもじした。

時折Kの方をちらちら見ている。その様子はまるで恥らう乙女のようだった。

もしも、蒲公英がここにいたならば今の翠をからかっていたらどう。

しかし、その彼女は今ここにいない、蜀にいる。彼女の決心の夕イミングを崩す者がここにはいなかった。

「な、なあ……。K？」

「何だ」

「もし、もしだぞ。私が一緒に町をまわりたいて言ったらついてきてくれるか？」

翠は決心がついたのかKへと話しかける。最後の言葉は尻すぼみに小さくなっていた。

翠は隣で上目遣いにKを見ている。その顔はトマトのように赤くなっていた。

「おまえとか？ うーん。そうだな、主に自由にしていると言われたら一緒に行っても良いぞ」

「本当か！？ 約束だからな！！」

Kがそう言うと、翠はパアッと顔を輝かせ両手でKの片手を掴みぶんぶんと振る。

馬超こと翠、この時彼女は初めての恋愛を本人は気づいていないが経験していた。

翠と一緒（後書き）

今、物語の後半部を書き上げているのですがついつつかり槍と黒い鎧の設定を忘れていました（汗）（汗）

途中これはさすがに無いだろ。見たいな感じで槍と黒い鎧を出します。のでご了承ください

というか、槍と鎧忘れるとかww。これないと、小説のタイトル成り立たないよ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4927y/>

恋姫＋無双 ～黒槍の御遣い～

2011年11月16日20時25分発行